日本私立看護系大学協会 会報
Japan Society of Private Colleges and Universities of Nursing
JSPCUN
2011 No.26

法人化に伴う使命

一般社団法人日本私立看護系大学協会会長　近藤　潤子

第２次大戦終結後の荒廃した日本が、やがて経済的に立ち直り世情が安定すると、生きることへの価値観が大きく変り、生活の質へのニーズが高まってきました。

めばえた生命を守り、安全に出生し、健やかに成長し、充実した生命を生き、安らかな死に至る人間の全生涯にわたり、生活を支援する看護職に対する関心が一段と深まりました。

人口は高齢化し、医療の高度化がすすむなかで、人間を全人的存在として理解しすぐれたケアの提供に備えて、看護教育に期待される内容も大きく変化しています。

18歳人口の減少が急速に進行する一方で、規制緩和にともなってめまぐるしく大学の増設が続いています。必然的に学生の定員割れを生じる大学が出現しはじめ、学生確保が至上目標になりかねない状況をもたらしています。これらの潮流の中にあって高度な看護教育をうたった看護人材確保法が制定され看護学士課程の開設が急増しています。

職業教育が大学、大学院に置かれるようになって日の浅いわが国においても、「卒業時到達目標とした看護実践能力の構成と卒業時到達度」が厚生労働省によって作成され、文部科学省において学士課程への展開が検討されています。各々の私立看護系大学は建学の精神の下、ユニークな看護職業人の養成に努めることになります。また看護師、保健師、助産師それぞれの職業団体等からコア能力が表明され、さらに専門職大学院、高度専門職業人養成課程など大学院修士課程レベルの教育課程の開設も進んでいます。

1976年に本会は、大学２校、短期大学９校からスタートしましたが、2011年現在、大学学士課程、短期大学あわせて100校をこえました。創設の当初は卒業生や教員のための研修セミナー等の事業をおこなっていましたが、現在は、事業を拡充し、私立看護系大学の教育・研究の充実向上、大学運営・経営の強化、関係機関との連携・協力、将来構想検討などの事業活動を推進しています。

看護実践能力の育成にはすぐれた教員、臨床指導者により理論、技術、人間愛の統合された実践行動をとおして育まれます。私立の教育機関は経営の自己責任を負っています。よい教育が行われるように教育機関を整備し運営することが必要です。

加盟校が増加して組織が大きくなり、私立看護系大学が看護教育全体に占める割合が増大し、社会的に大きな役割を担うことが期待されるようになりましたので、このたび、一般社団法人として法人格を取得しました。増大する看護ニーズに対応し期待される私立大学が社会の要求に応ずるためにも、独立した主体として立法、行政などに対して公に発言ができるようになりました。私学としての本協会の特性を看護教育の改善向上のために活かして活動を進めたいと思います。

日本私立看護系大学協会総会記念講演

日時：平成23年7月8日
場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

「大学の質保証を考える－私立看護系大学の場合－」

国際基督教大学学長　鈴木典比古氏

講演主旨

大学の質の保証に関しては、平成23年4月から「教育情報」公表の義務が法令化され、全ての大学は教育情報を公表する義務があるとともに、自分の大学がすぐれた教育を行っているという大学の発信の手段として考えるという二つの役目がある。各大学はミッションを持って教育・研究に取り組んでいることを高らかに宣言すべきである。

『学士課程教育の構築に向けて』（2008年）が公刊されて以来、教育の質の保証が重視されている。基本的な認識としてグローバル化する知識基盤社会において、学士レベルの資質・能力を備える人材養成は重要な課題である。他方、目先の学生確保が優先される傾向があるなか、大学は学部教育の水準や内容が曖昧になっていないか、また学位の国際通用性が確保できるか等を考える必要がある。

各大学の自主的な改革を通じて、学士課程教育において、①入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）、②教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、③学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の、三つの方針の明確化等を進める必要がある。

わが国の大学が掲げる教育研究の目的等は総じて抽象的である。学位授与の方針が、教育課程の編成や学修評価のあり方を律するものとなっていない。また、大学も多様化はするが、学士課程を通じた教育水準の共通性等をいかに確保していくかを考えていく必要がある。

カリキュラム・ポリシーでは、学修の体系性、順次性が配慮されていない問題がある。学生の学習意欲の低下や目的意識も希薄化している。改善策として、大学は卒業に当たっての学位授与の方針を具体化、明確化し、積極的に公表すべきであり、中央教育審議会は日本学術会議に学士力が示す内容に関して基本的考え方を示すことを要請している。

カリキュラムは、順次性のある体系的な構造をもち、学生の学習時間の実態を把握した上で、単位制度を実質化すべである。また分野別のコアカリキュラム作成等を通して支援する必要もあろう。そして、成績評価基準を作成して、GPA等の客観的な評価基準を適用すべきである。

入学者受け入れのアドミッション・ポリシーについては、大学は入学者受け入れ方針を明確にすることや、入試方法の見直しをすること、初年次教育の充実等を図るべきである。日本の医歯看護系教育の改革と充実にとって必要なのは、いわゆるMedical Policy（医療政策）ではなく、Health Policy（健康政策）あるいはHealthcare Policy（健康ケア政策）であり、臨床医を目指す学生にとっては、人間的な誠実さと、自主的・自立的な学習態度は優れた臨床医に不可欠である。

大学の主役（メイン・アクター）が学生であるとすれば学位はメイン・アクターが演じる演題、演劇の題目を示すものである。また、シラバスは、学生は最終的にはこういう人材になっていくことを示すための絵コンテの役割を果たしている。『学士課程教育の構築に向けて』においては、学士課程共通の学修成果は、四つの段階を踏んで学士力として積み上げていくものとされる。この四つの段階というのは、最初に知識・理解という段階、その上に立って汎用的技能、次に態度・志向性、最後に、統合的な学習経験と創造的な思考力、である。

学生の学士力と教員の教員力がコラボレーションして、教育の現場が創られていくが、この学士力と教育力の関係は①学士力＝f（教育力）、②学士力＝教育力、③教育力＝g（学士力）、等ダイナミックな関係であり、この三態を創ることが重要である。このダイナミックな授業の展開によって、四つの段階をもつ学士力が涵養されるのである。

（文責：愛知医科大学　大野 弘恵）

理事会報告

平成23年度　第１回理事会報告

日　時：平成23年５月21日（土）　13：00～16：30
場　所：日本私立看護系大学協会事務局
　　（市ヶ谷　千代田ビル405号室）
出席者：15名　委任状４名　（全役員数21名）

報告事項

1．各事業活動代表理事より平成22年度事業活動報告がされ、承認された。
2．事務局より平成22年度決算について、収入、支出とも、ほぼ予算どおりに執行できたと報告があった。
3．平成22年度の監査は５月16日と５月18日に井部俊子、守本とも子両監事によりそれぞれ行われた。監査報告書には、本年度より定款に従い、会計監査のみでなく、理事の職務の執行も監査対象として書き込んだと報告があった。

審議事項

1．各事業活動代表理事より平成23年度・中期・長期事業活動計画及び平成23年度予算（案）について説明され、承認された。
2．平成23年度予算案に関し事務局から説明があった。収入に関しては、震災で被害を受けた加盟校の平成23年度会費を免除し、予算立てをした。
支出に関しては、科目等の表示を一部変え、総会、理事会会議費を事業費扱いとし、賃借料、旅費交通費、人件費に関しては、事業費と管理費を６対４で按分した。管理費の項目数も分かりやすく増やした。
平成23年度以降の決算書は、平成22年度の様式から変更し、本予算書の様式に準じて作成することとする。
3．理事選出に係る会員校推薦校について、前理事会で選出された推薦校のうちから、各地区それぞれ選出し、決定した。
4．平成23年度新規校６校の加盟を承認した。
5．本年度総会の情報交換会は中止とし、グループワークを行うこととなった。

平成23年度　第２回理事会報告（案）

日　時：平成23年７月30日（土）　13：00～15：30
場　所：日本私立看護系大学協会事務局
　　（市ヶ谷　千代田ビル405号室）
出席者：15名　委任状４名　（全役員数22名）

審議事項

1．新理事が多いため、審議に先立って各理事の自己紹介を行った。
2．総会アンケート結果について、「参考資料　総会参加者アンケート集計結果」を元に、事務局から説明があった。研究助成金の増額についての要望を検討課題としてはどうかという意見が出された。
3．各事業活動代表理事より平成23年度・中期・長期事業活動計画及び平成23年度予算（案）について、新理事への事業活動の紹介も兼ねて説明がされた。
4．近藤会長から①加盟大学・短期大学の卒業生の表彰②私立看護系大学・短期大学新規採用教職員研修、の２つの事業が提案された。
5．平成23年度研究助成に関し、「看護学研究奨励賞」への応募は６件あったが、いずれも基準点に満たなかったので今回は授賞者なし、「若手研究者研究助成」は15件の応募で５件の採択、「国際学会発表助成」は12件の応募で３件を採択したと、担当理事から報告されたが、総会での意見、アンケートの要望にもあるように、助成はできるだけするという方向で考え、基準点で助成者を選考するのではなく、応募者グループでの相対評価とし、授賞者なしという選考結果ではなく、「看護学研究奨励賞」も１人選考することとなった。
6．事業活動担当役員を選出した。（別表）

報告事項

事務局から事業費会計取扱要項の経理処理について、支出に係る項目を４項目から６項目に増やしたと説明があった。

その他

各事業活動の規程を作成するので、理事に協力の依頼があった。

平成23年度　総会報告

日　時：平成23年７月８日（金）11：00～17：00
場　所：アルカディア市ヶ谷　３階　富士の間
出席者：187名　委任状55名　（全役員数376名）

審　議　事　項

平成23年度加盟校数は、新加盟校の６校（京都光華女子大学、群馬医療福祉大学、純真学園大学、人間総合科学大学、森ノ宮医療大学、了徳寺大学）を加え126校（大学107校、短期大学19校：大学と合わせて１つの議決権を持つ３校を含む。）となった。平成22年度は定例理事会が４回（第４回は紙面理事会）、臨時理事会が１回開催されたこと、平成22年度年報が作成され、７月下旬を目途に会員校に送付されることが報告された。

審　議　事　項

1．平成22年度事業活動について、各事業活動担当理事より報告され、承認された。
2．平成22年度収支決算報告が事務局より行われた後、井部俊子監事より、平成23年５月16日、18日に守本とも子、井部俊子監事により監査を行った結果、理事の職務の執行、業務報告書について、定款に従い、本協会事業の状況を正しく示しているものと認め、また財産の状況並びに決算書類及び事業報告書等についても、すべて適正であったと報告された。
引き続き監事の意見として、①将来構想特別会計の使途など目的に関し検討を続けていくこと②事業費の執行率が76.8％ということなので、事業活動をより計画的に予算に従ってすすめていくことが提言された。以上、承認された。
3．平成23年度・中期・長期事業活動計画について、各事業活動担当理事より説明され、承認された。
4．平成23年度予算案について事務局より説明され、承認された。研究助成事業の助成金額を、加盟校が増えている中、若手研究者を育てる意味からも増額してほしいとの意見が出された。
5．理事選任等について森業務執行理事から説明があり、９名の理事辞任、２名の理事交代、新たに８名の理事の選出が承認された。新理事は下記の通りである。
愛知きわみ看護短期大学・御供泰治、茨城キリスト教大学・藤村真弓、北里大学・髙橋眞理、帝京大学・星直子、新潟医療福祉大学・塚本康子、日本赤十字看護大学・高田早苗、日本赤十字豊田看護大学・野口眞弓、淑徳大学・長澤正志
6．総会終了後、平成22年度決算報告に関し、多くの教員が参加できるようにセミナーの機会・会場を増やし、教員の教育や研究の質を高めるよう、繰越金を増やさず使用して会費を還元してほしいと、意見が出た。

表１　日本私立看護系大学協会　平成23年度　役員一覧
（任期：平成23年7月8日から）

役　割	所　属　校	氏　名
会　長	天使大学	近藤潤子
副会長	九州看護福祉大学	二塚信
	聖マリア学院大学	矢野正子
理　事	愛知医科大学看護学部	八島妙子
	愛知きわみ看護短期大学	御供泰治
	藍野大学医療保健学部	中桐佐智子
	茨城キリスト教大学看護学部	藤村真弓
	岩手看護短期大学	小川英行
	北里大学看護学部	髙橋眞理
	吉備国際大学保健医療福祉学部看護学科	尾瀬裕
	神戸常盤大学保健科学部看護学科	鎌田美智子
	国際医療福祉大学保健医療学部看護学科	福島道子
	昭和大学保健医療学部看護学科	菅原スミ
	聖路加看護大学看護学部	菱沼典子
	帝京大学医療技術学部看護学科	星直子
	新潟医療福祉大学健康科学部看護学科	塚本康子
	日本赤十字看護大学	高田早苗
	広島文化学園大学	佐々木秀美
財務担当理事	淑徳大学看護学部	長澤正志
業務執行理事	日本赤十字豊田看護大学看護学部	野口眞弓
監事	聖路加看護大学	井部俊子
	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科	守本とも子
名誉会長	聖路加看護学園	日野原重明
		堺隆弘
		樋口康子

（各役職：大学名五十音順）

表２　日本私立看護系大学協会　平成23年度　事業活動担当役員　　◎：代表者

事業活動名	担当者（所属機関）
1）大学における教育に関する事業 ①看護学教育 ②教職員の資質向上に関する事業	◎矢野　正子　（聖マリア学院大学） 中桐　佐智子　（藍野大学） 星　直子　（帝京大学）
2）大学における研究に関する事業 ①学術研究および学術研究体制に関する事業 ②研究助成事業	◎佐々木　秀美　（広島文化学園大学） 福島　道子　（国際医療福祉大学） 御供　泰治　（愛知きわみ看護短期大学） 塚本　康子　（新潟医療福祉大学）
3）教育、学術および文化の国際交流事業	◎二塚　信　（九州看護福祉大学） 尾瀬　裕　（吉備国際大学）
4）大学運営・経営に関する事業	◎小川　英行　（岩手看護短期大学） 長澤　正志　（淑徳大学） 近藤　潤子　（天使大学） （オブザーバー）
5）関係機関との提携等に関する社会的事業	◎菅原　スミ　（昭和大学） 鎌田　美智子　（神戸常盤大学） 藤村　真弓　（茨城キリスト教大学） 高橋　眞理　（北里大学）
6）会報・出版等の広報に関する事業	◎八島　妙子　（愛知医科大学） 野口　眞弓　（日本赤十字豊田看護大学）
7）将来構想検討委員会	◎菱沼　典子　（聖路加看護大学） 近藤　潤子　（天使大学） 矢野　正子　（聖マリア学院大学） 二塚　信　（九州看護福祉大学） 高田　早苗　（日本赤十字看護大学） 佐藤　弘毅　（目白大学） （外部委員）

新加盟校紹介

京都光華女子大学
健康科学部看護学科

学科長　玉里　八重子
〒615-0882 京都府京都市右京区西京極葛野町38
Tel：075-366-2665　FAX：075-366-2665

京都光華女子大学は70年余の女子教育のもと総合学園：光華学園として発展してまいりました。看護学科は、本学の校訓である「真実心」を具現化した看護教育をめざし、今年４月に開設しました。この看護学科では、まずヒトの命に向き合い看護されるものと看護するものが共に成長し共生する態度を形成することです。看護学は人々の生涯の暮らしと健康にかかわり、「生老病死」の自然な営みに向き合います。それには、看護の知識・技術・技能を十分に統合した看護実践能力を必要とします。健康科学部には既に開設されている健康栄養学科との共通科目をカリキュラムに導入し、他職種間の相互理解や協働を学びます。さらに、文学部には臨床心理学、キャリア形成学部には社会福祉専攻など看護学の関連領域を備えていて、看護医療福祉の総合的視野を持つことが出来ます。又、学園の宗教行事等を通して学生・教員・職員間の関係を深めています。学生は、修学支援や学生生活支援を大学全体が構築するサポートシステムにより、いつでも受けることが出来ます。本学は思いやりの心を育み、地域の人々の生活及び国内外で、質の高い看護実践能力を発揮できる看護職（看護師、保健師、助産師、養護教諭１種）を目指します。

群馬医療福祉大学
看護学部看護学科

学部長　福山　なおみ
〒375-0024 群馬県藤岡市藤岡787-2
Tel：0274-24-2941　FAX：0274-23-4160

本学は、1449年（室町時代）現理事長・学長鈴木利定(哲学)の遠祖である長尾昌賢による学問所の開設に始まり、幼稚園、専門学校、短期大学、社会福祉大学、大学院を設立し、これまで教育・研究の礎を築いてまいりました。

本学部は、母体である前橋キャンパスに次いで、2010年４月に県内７校目の看護系大学で、地域に根ざした大学として藤岡キャンパスに開設し２年目になります。入学定員80名、看護師・保健師・養護教諭の育成を行っております。

大学伝統の建学精神「仁」は“真心を育て、人の道を行う”こと、伝承の教育理念「知行合一」は“真心を実践で示す”ことです。また教育目標の一つである『ボランティア活動』は、「対人支援・援助」を学ぶための人間学の根本に位置づけ、人格形成を目指しております。こうした大学の基本理念は、ナイチンゲールの哲学である『三重の関心』（理性的関心・技術的関心・あたたかく真心のこもった関心）と共鳴し、看護の基本であるケアにつながります。学生が、科学的根拠に基づき、ケアの対象となる人の身体的苦痛や精神的・社会的苦悩に寄り添いながら看護を学び、その人も学生も互いにケアされることを通して人間的な成長ができることを目指しています。そのために、教育・実践・研究の一体化を図り、看護に対する価値観の形成と共に、既存の社会福祉学部との交流を通して、広い視野で医療・福祉を考え実践できる看護専門職者の育成に努めたいと思います。さらに、医療機関・福祉施設・事業所・学校はもとより、地域住民が自らの健康を守ることができるよう教員と相互に学び合う生涯教育の場として地域密着型の環境づくりを目指しているところです。

純真学園大学
保健医療学部看護学科

学科長　二重作　清子
〒815-8510 福岡県福岡市南区筑紫丘1-1-1
Tel：092-554-1255　FAX：092-552-2707

純真学園大学は、2011年4月に、看護学科、放射線科技術学科、検査科学科、医療工学学科の4つの学科からなる保健医療学部として福岡市の南区に開設いたしました。

純真学園の歴史は昭和31年、医師であり教育者であった福田昌子によって「学校法人純真女子学園」を設立したことに始まります。建学の精神「気品」「知性」「奉仕」を備えた、医療の高度化に対応した人材の育成を目指し、2016年には純真学園創立60周年を迎えます。

本学は、高度化・専門化が進む現在の医療現場に対応できるように各職種の専門性や役割について理解を深めるインタープロフェッショナル(多職種連携)教育を導入しています。また、4学科合同・横断型カリキュラムを展開し4年間を通して段階的に学びます。さらに、リメディアル教育の導入や、SG（Small Groups）制による学生支援体制などを取り入れています。看護学科においては、看護師に必要な専門的知識と技術を身につけるとともに、チーム医療の重要性を学び、医療人として求められるコミュニケーション、リーダーシップおよびプレゼンテーション能力を高めることを目指しています。そして何よりも、目の前にいるその人に、気遣い、配慮のできる看護者を育成することを大切にしています。

西鉄大橋駅から徒歩10分の交通の便、緑に囲まれた純真の森には四季折々の草花が咲き誇り、自然豊かなこと、高等学校や短期大学が同じ敷地に隣接し活気あふれる環境にあることも本学の特色です。

人間総合科学大学
保健医療学部

看護学科長　松木　悠紀雄
〒339-8555 埼玉県さいたま市岩槻区太田字新正寺曲輪354番3
Tel：048-758-7111　FAX：048-758-7110

人間総合科学大学は、2000年に通信制の人間科学部人間科学科を蓮田キャンパス（さいたま市岩槻区馬込）で開学し、東京サテライト（秋葉原）と併せて大学通信教育に取り組んできました。2005年には同キャンパスで通学制の人間科学部健康栄養学科を併設しました。さらに、1993年から医療職の養成を行ってきた早稲田医療技術専門学校の校舎を改築・改装して、人間総合科学大学の岩槻キャンパスとして2011年4月に保健医療学部を開設しました。

保健医療学部は、看護学科（入学定員80名）とリハビリテーション学科で構成され、リハビリテーション学科はさらに理学療法学専攻（入学定員40名）と義肢装具学専攻（入学定員30名）から成ります。校舎は、人形の町岩槻の市街地に近く、江戸時代から由緒のある日光御成街道沿いに建てられています。

本学は、「こころ・からだ・文化」の３領域から人間の総合的な理解を目指す「人間総合科学」という理念をもとに創設された大学であり、その理念をベースとして保健医療学部では「専門職業人養成」と「社会貢献」に重きをおいて教育研究に取り組むことを特色としています。「こころとからだ」の有機的な統合を図る心身健康科学にもとづく医療人の養成を行い、「自立と共生」のこころを育む大学教育を今も目指しています。

看護学科では、人間の多面的理解を深める教養教育と看護学教育の学修を基に、関連職種と連携・協働しながら疾病を伴う心身機能障害や生活機能障害の改善・向上へ向けた支援と、それらの予防へ向けた保健医療活動を展開できる人材を養成するためのカリキュラムを編成しています。

看護学科の教育目標は、次の５つです。①人間を多面的・総合的に理解し、また倫理的な態度をもって適切な人間関係を築くことができる能力を養う。②科学的根拠に基づいた専門的知識・技術を習得し、安全で質の高い看護を実践できる能力を養う。③社会制度をふまえ、保健・医療・福祉分野の専門職間および地域との連携・協働のできる能力を養う。④人々の生活文化・価値観を尊重し、健康の維持・増進、疾病の予防への支援ができる能力を養う。⑤看護の質を向上させるとともに、グローバル社会の進展も見据え継続して自己学習できる能力を養う。

なお、本学の各キャンパスには、埼玉県出身でスウェーデンを拠点として活躍する中島由夫画伯によるアートが大学の随所に展示されており、文化を重視する本学の特色となっています。

森ノ宮医療大学
保健医療学部看護学科

学科長　村上　生美
〒559-8611 大阪府大阪市住之江区南港北1-26-16
Tel：06-6105-4089　FAX：06-6105-4089

理学療法学科と鍼灸学科を有する森ノ宮医療大学保健医療学部に、本年度から看護学科が創設されました。学士課程の看護学教育では、豊かな人間性の陶冶と、実践に際して礎となる確かな知識や技術を育みたいと考えております。保健師教育における実習科目の修得が厳しい大阪にあって80名の定員のうち10名の保健師課程選択制と致しました。保健師課程を選択しない学生も関連科目を履修させ、地域に強い看護師の養成を目指すことにしました。

１期生を迎えてこれから森ノ宮医療大学の看護の文化を創造していくわけですが、看護学科が関係する様々な領域と有機的に結びつくよう努めたいと思っております。例えば、学科間のバリアーを低くして東西医学の融合を図る試み、大学と地域のバリアーにおいても地域の健康ニーズを把握しつつ看護のはたらきかけを通して地域と大学のバリアーフリーを目指したい、同様に大学と実習施設間、教員間、学生と教師間、これらのバリアーを自由で明朗、透明感を高くしていくよう、皆で研鑽し豊かなコミュニケーション力を発揮したいと考えております。

先輩校の皆様方ともいろんな形の交流ができればと思っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほどどうかよろしくお願いいたします。

了徳寺大学
健康科学部看護学科

学科長　佐藤　みつ子
〒279-8567 千葉県浦安市明海5丁目8番1号
Tel：047-382-2111　FAX：047-382-2017

大きな空の下に広がるお洒落な街並み、悠々とした街路、リゾートタウンのような表情を見せる人気エリア「新浦安」の東京湾ベイサイドに了徳寺大学はあります。

平成18年４月に芸術学部、健康科学部の2学部体制で開学。

前身であるリハビリテーション医学、東洋医学の専門学校運営で培った医療専門人材の育成ノウハウと、日本画・油絵・書道・華道・こころアートと、芸術5分野の卓越した専門教員を特色として、開学以来各方面から高い関心を集めました。

その後、健康科学部に整復医療・トレーナー学科を新設。国家資格である柔道整復師を核として、アスレティックトレーナー資格、中高保健体育教員免許も4年間で取得できるという今までになかった実学志向の学科は、大きなトピックスとして話題になりました。

了徳寺大学では開学理念のひとつに、「医療と芸術の融合」という大きなテーマを抱えています。それは、（人は、身体の健康だけでなく、心の健康も必要としている）という考え方に出発しています。

その大きな目的に向けて一歩踏み込んだものが平成23年度に健康科学部第三の学科として設置された「看護学科」です。

最大の特徴はカリキュラムの中に必修科目として芸術系の科目を取り入れたことと言えます。書道や華道などを通して美やその道を探求し、感性豊かな看護師の育成を目指すとしています。１学年は定員80名、看護師・保健師のほか、養護教諭１種免許状の取得も可能です。

いずれの学部も、その道の専門家を育成するためのよく練られたカリキュラムのもとで、熱心な教員によるきめ細かい指導を心がけています。了徳寺大学は日本の伝統的精神である礼節や和の心を以心伝心で伝承させる環境を醸成しています。専門とする学問分野での厳しい修練を通じて、専門職として十分な知識と技能を修得するだけでなく、医療人として大切な人間性を育むことに力を注いでいます。患者様の立場になって、幅広い知識と人間愛に満ち満ちた人材を輩出することに、教職員一同、心血を注ぐ覚悟です。

我が校の国際交流プログラム、佐久大学看護学部

広報委員会委員長　キシ　ケイコ　イマイ

小規模でも息の長い国際交流活動として佐久大学の例を紹介いたします。まず大学について説明いたしますと、佐久大学は長野県の佐久平盆地、新幹線佐久平駅から徒歩15分の新設校で、平成20年に開設した看護学部単科の大学です。大学の敷地は、すでにある広々とした信州短期大学のそれと共有されています。長野オリンピックや新幹線のおかげで、地域の人口は徐々に増加しています。佐久平からは浅間山が近くに見られるなどの自然の美しさに加え、交通の便が良く、寒冷ですが、日照時間は日本一長く、雪も少ないので永住のために移住してこられる人もいます。全学生数は今年度（23年度）で４学年が揃い、400名近くになります。また、本学には別科助産専攻コースも設置され、助産教育を通じて地域に貢献しています。

本学の国際交流プログラムのひとつにUMAP（University Mobility in Asia and the Pacific）があります。UMAPは1993年にできた、Non government organization で、アジア、太平洋環内の大学間で学生が単位互換できる学習システムです。すなわち母国以外の大学で学習したものを、母国でも外国の大学でも単位として認めるという学生の国際交流を奨励する制度です。この組織に参加している国は沢山ありますが、日本では92大学が参加しており、当大学と協定を結んだ大学はタイ王国のセントルイス大学看護学部です。タイのセントルイス大学、ブンジャヌラック副学長をとおし、2008年タイから教員が本学へ派遣されました。この時期、教員による国際共同研究“産前、産後の鬱の研究”がはじめられました。しかし、それ以前から「鬱とその関連要因」に関して本学はＵＳＡ、タイ、台湾と共同研究を行っていました。その後、ブンジャヌラック教授の２回目の訪日で、UMAPの学生の単位互換制度の協定が進み、2011年４月早々、セントルイス大学から看護学部３年生のMs.S. Rungsawangさんが２ヶ月間の予定で当校の科目を履修しにきます。彼女は単位互換制度の受け入れの第１回生です。こちらで地域看護学の実践（１単位）、助産看護学倫理（0.5単位）、リスクマネジメント（１単位）、看護管理学（１単位）を集中的に学ぶ予定です。４月以降の交流結果はまた次の機会にご報告できたらと思います。

当校ではまた、大学院プログラム開設の準備中で、大学院学生を対象にセントルイス大学と国際交流をすすめようと準備中です。看護研究のフィールドをタイにつくるとか、大学教員間で講義、研究を共有することなど、今後、さらに交流の度合いを深めて行くことが期待できます。

このような国際交流を通じて我が大学の合言葉である“Being with”という看護の心をタイの国の人々へ、タイの看護大学の教員や学生へつなげたいと願っています。

研究助成受賞論文

平成23年度看護学研究奨励賞

Gender differences in pain modulation by a sweet stimulus in adults: A randomized study

掛田　崇寛

ABSTRACT

Nursing interventions using sucrose stimulus-induced analgesia (SIA) has frequently been investigated for pain relief in human neonates. The sweet stimulus of sucrose promotes analgesia through the activation of the endogenous opioids system in an antinociceptive process that inhibits afferent pain input at the level of the dorsal horn, taking advantage of a sensation for sweet taste. However, SIA is less well-studied in adults the reason why the effect of SIA declines with age and maturation in both pup rats and human neonates. In addition, potently this raises the possibility that there could be a gender difference in the efficacy of SIA in human adults. Therefore the current study, conducted with a randomized cross-over design, aimed to examine whether the SIA for cold pain has gender differences in adults.

Experimental pain was induced with the cold pressor test (CPT). This study used two solutions at room temperature during the CPT: 24% weight/volume sucrose water (SW) and distilled water (DW) as a control. Twenty men and 20 women immersed their hands in cold water while receiving an oral stimulus of SW or DW and their pain response was examined. Pain reactivity was measured by six instruments: pain threshold, pain tolerance, α-amylase value in saliva, psychological ratings with the profile of mood states, two visual analogue scales of pain and taste. Subjects signed a consent form after the purpose and procedures of this study had been explained. This study was approved by the ethical committee at the research institution at Kawasaki University.

Pain threshold time in men increased significantly under the influence of SW ($P < 0.05$) related to DW. However, the mean time of pain tolerance in men was not significantly different with SW and DW. In women, on the other hand, the mean time to reach the pain threshold and pain tolerance was not significantly different with SW and DW.

These findings reveal that holding SW in the mouth can attenuate the level of pain sensitivity to cold pain in adult males. Conversely, oral retention of sweet solution in women could not attenuate nociception unlike in adult men, indicating that gender differences are probably involved in the expression of sweet analgesia. More research is warranted, however the sweet stimulus could be put to practical application as an adjunct to acute pain management in men.

掲載雑誌：Nursing & Health Sciences, 13(1), 34-40, 2011.

連絡先：〒701-0193 岡山県倉敷市松島288
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科
電話086-462-1111（内線55063）
Fax 086-463-3508
E-mail: kakeda@mw.kawasaki-m.ac.jp

● 平成23年度国際学会発表助成 ●

Cost effectiveness of home telenursing in preventing acute respiratory exacerbation in COPD patients with Home Oxygen Therapy: A randomized- controlled trial

聖路加看護大学　亀井　智子

Purpose: To examine the cost effectiveness of a home-monitoring based telenursing in preventing acute respiratory exacerbation in patients with severe chronic obstructive pulmonary disease(COPD) with home oxygen therapy (HOT), by conducting a randomized controlled trial.

Methods: Thirty-nine COPD patients with HOT were randomly assigned into a telenursing (experimental) group (n=20, mean age 76.0(SD 7.0) and a control group (n=19, mean age 77.8(SD 6.4). Experimental group was given usual treatment (UT) by the primary care physician plus daily telenursing (TN) for three months and the control group received only UT. Both treatment regimens were administered for three months. TN includes monitoring daily patient's physical (i.e., SpO2, BP, P) and mental (i.e., mood, irritated, agitated) status and triage acute exacerbations based on the nursing protocols. When received data was applicable items to the trigger point of the patient's status, telenurse would communicated and assessed the patients via telephone or videophone and gave an appropriate instruction for them. Acute exacerbation events and medical expense incurred during this period were recorded and compared.

Results: The mean medical expense incurred by the experimental and control group were $1683.8/month and $1487.4/month, respectively. Acute exacerbations did not occur in 75.0% of patients in the experimental group and in 36.8% of patients in the control group. The cost-effectiveness ratio (CER) calculated from medical expenses and the non-exacerbation rate was 22.5/life saved in the experimental group, and 40.4/life saved in the control group. CER was lower in the experimental group.

Conclusions: Home-monitoring based telenursing has a potential cost-effective nursing care in preventing acute respiratory exacerbation in patients with severe COPD on HOT.

学会名：Conference name, host city, presentation date.
International Conferences in Community Health Nursing Research Biennial Symposium 2011.
発表場所：カナダ、エドモントン
発 表 日：2011年5月4-6日

Effects of Tactile Care for Increasing Relaxation of Japanese Elderly People

日本赤十字看護大学　川原　由佳里

Purpose: Health promotion is an important factor for the quality of life of elderly people. Strategies for improving health include various complementary therapies, among which tactile care is a method of effleurage massage using slow stroking and firm pressure. Previous research suggests that the tactile touch decreases patients' anxiety and increases circulatory stability during intensive care but this research did not directly measure its effect on relaxation. This purpose of the present study is to investigate the effects of tactile care on relaxation in Japanese elderly people.

Methods: 20 Japanese elderly people were randomly allocated to two groups of 10 persons each. The intervention consisted of a left hand massage using tactile care for a duration of 10 minutes, which was given once to each participant in the experimental group. The physiologic measures of heart rate, heart-rate variability, skin blood flow, and skin temperature were measured continuously, and blood pressure was measured immediately before and 5 minutes after the intervention. The subjects' self-reports of mood states (measured by Profile of Mood States - Brief Form Japanese Version) as well as relaxation (measured by Visual Analogue Scales) were recorded before and 5 minutes after the intervention.

Results: The experimental group did not differ significantly from the control group in gender, age, or baseline physiological and psychological measures. Repeated measures analysis of variance indicated that there was significant effect from the intervention on heart rate, high-frequency component of

heart-rate variability, and skin blood flow. After the intervention, systolic blood pressure, Confusion (a subscale of the POMS-BSJV scale), and relaxation (VAS) of the only experimental group were significantly lower than before the intervention.
Conclusion: The results indicated that tactile care had the effect of increasing relaxation, as evidenced by physiological and psychological changes occurring during a brief intervention administered to Japanese elderly people.

学会名：22nd Sigma Theta Tau International Research Conference
発表場所：メキシコ、カンクン
発 表 日：2011年7月11日-13日

Cost-minimization analysis of computerized fall risk assessment and measures to prevent falls

順天堂大学　飯島　佐知子

Objectives: A reliable fall risk-assessment tool was developed for inclusion on electronic medical charts to assess the risk of falls and to formulate measures to prevent them. We subjected the tool to cost-minimization analysis.
Methods: Subjects were inpatients at a public hospital with 716 beds. Before the tool's introduction in 2007, a "Fall Risk-Assessment Form" containing 30 items in nine categories was used. Based on data provided by 2,191 individuals, a highly sensitive and highly specific "Fall Risk-Assessment Tool" was developed with 19 items in seven categories. Since 2009, the tool has been used in conjunction with a "Fall Prevention Plan" prepared automatically following the assessment.
Results: There were 12,507 patients affected before introduction of the tool and 11,512 afterward. The number of individuals injured by falls was 23 before using the tool and 21 afterward. Surgery, such as total hip replacement, was performed seven times before using the tool and one time afterward (p=0.001). Medical expenses for treatment were 677,040 yen per person before using the tool and 182,517 yen per person afterward（p=0.033）.
Conclusion: The reported number of surgeries decreased significantly. The reduction in costs was statistically significant. The computerized tool was less costly than conventional measures.

学会名：International Health Economics Association. 8th World Congress on Health Economics Congress
発表場所：カナダ、トロント
発 表 日：2010年7月10-13日

● 平成23年度若手研究者研究助成 ●

2型糖尿病の新しい評価尺度としての睡眠パターンに関する基礎的研究

大阪医科大学　西尾　ゆかり

コンフォート理論に基づく妊娠中期以後の妊婦を対象とした歌唱クラスによる心理的効果

宝塚大学　宮本　雅子

脳卒中者が経験を語ることの意義の探求とリハビリテーション効果への可能性に関する研究

千里金蘭大学　北尾　良太

通常学校に通学する医療的ケアを要する子どもや家族が認識する看護師の役割

千里金蘭大学　清水　史恵

灸・指圧・足浴法による三陰交のツボ刺激効果の比較ー生理・心理的評価を用いてー

藤田保健衛生大学　清水　三紀子

事務局からのお知らせ

平成23年度　講演会のお知らせ

■主　催：大学における教育に関する事業
■日　時：平成24年１月７日（土）９：30～16：00
■場　所：日本青年館（Tel　03-3401-0101）
■テーマ：看護研究と科学性－質的研究をエビデンスとするために－
■プログラム：
第１部　講演　９：30～12：30
早稲田大学国際教養学部　教授
池田　清彦　氏
「構造主義科学論と看護」
東邦大学看護学部　学部長・教授
髙木　廣文　氏
「質的研究を科学する」

第２部　ワークショップ　13：30～14：30
グループワーク
20名前後のグループによる討議とまとめ
第３部　ワークショップの報告　14：50～16：00
グループワークの結果報告

■担当理事・問い合せ先
矢野　正子　聖マリア学院大学学長
（TEL：0942-50-0274　FAX：0942-50-0229
E-mail：m-yano@st-mary.ac.jp）
中桐　佐智子　藍野大学医療保健学部学部長
（TEL：072-627-1711　FAX：072-627-1753
E-mail：s-nakagiri@aino.ac.jp）
星　直子　帝京大学医療技術学部看護学科教授
（TEL：03-3964-1211　FAX：03-3964-4174
E-mail：hoshi@med.teikyo-u.ac.jp）

原稿募集

あなたの学校をアピールしてみませんか

募集１．加盟校のユニークな取り組み
内容：大学として取り組んでいる、学生や教員あるいは地域の人たちを対象にしたユニークなプログラム。
原稿：2000字程度（写真400字換算を含む）

募集２．我が校の国際交流プログラム
内容：学生・教員を対象とする海外交流プログラムについて、その内容と参加者のレポート。
原稿：2000字程度（写真400字換算を含む）
原稿にはできるだけ活動中の写真を含めてください。

募集３．その他
トピックスや会員校間で共有したいニュースがありましたら、お知らせください。

原稿発送先
添付ファイル（テキストファイル）にて下記の事務局メールアドレスに電子メールでお送りください。

原稿掲載
原稿は順次掲載致しますが、掲載時期については広報担当者にご一任ください。

編集後記

日本私立看護系大学協会は、新加盟校6校を迎え126校となりました。総会記念講演のテーマであった大学の質の保証に関して、学士レベルの資質・能力を備える人材育成に、ミッションを持って取り組んでいる私立看護系大学の看護学教育に果たす役割は大きいといえます。

会報は、事業活動をお知らせするとともに、会員校からの情報発信としてもご利用いただけます。会員校の皆さまには、会報に関して今後とも忌憚のないご意見やご要望を編集委員会にお寄せいただければ幸いに存じます。

会報26号の発刊に当たり、ご多忙な中、原稿の執筆を快くお引き受けくださいました諸先生方に感謝申し上げます。

お詫びと訂正：会報25号１頁、会長の職位に誤表記があり、ホームページに掲載している会報で訂正させていただきました。お詫び申し上げます。　（愛知医科大学　八島妙子）

日本私立看護系大学協会会報　第26号
発行者：日本私立看護系大学協会　http://www.spcnj.jp/
〒162-0845　新宿区市谷本村町3-19　千代田ビル405号室
TEL 03-5879-6580／FAX 03-5879-6581　E-mail jpncs@jade.dti.ne.jp
編集責任者：八島妙子　野口眞弓
編　集
愛知医科大学看護学部
大野弘恵　水谷聖子
日本赤十字豊田看護大学
小林尚司　石黒千映子
印刷所　山菊印刷株式会社